

「十二単衣を着た悪魔」

監督 黒木瞳

品性保つ生き方を参考に

内館牧子の原作小説にほれ込んだ女優・黒木瞳が映画「十二単衣を着た悪魔」を、自身の長編第2作として監督した。現代のダメンス・フリーターが源氏物語の世界にタイムスリップ。宮廷人との出会いを通して成長するヒューマンコメディ。「登場人物たちの前向きな言動が、今、行き先を見失っている人に勇気を与えられれば」と話す。就職試験に落ち続ける雷（伊藤健太郎）。優秀な弟と比べられ、恋人にフラレ、自己嫌悪を募らせていたその時、激しい雷雨に見舞われ、目覚めるとそこは平安時代、源氏物語の中だった。持っていた葉が天皇の妃・弘徽殿女御（三吉彩花）の病気に効き、陰陽師として重用さ



「監督としてはまだまだ新米。スタッフの意見も取り入れながら撮影した」と振り返る黒木瞳＝大阪市内（撮影・後藤亮平）

「源氏物語」舞台 若者の成長描く

れる。弘徽殿は自分が産んだ一宮を帝にと躍起だが、異母弟の光源氏は容貌も才能も抜きんでいた。米映画「ラダを着た悪魔」にヒントを得たという原作。同作では切れ者雑誌編集長のボジションに、弘徽殿をあてた。「源氏物語では光源氏の敵役で、恐ろしい女性として描かれた弘徽殿を『早すぎたキャリアウーマン』としてとらえたところが斬新と黒木。その上で「設定が荒唐無稽なので、自由に物語を膨らませた」と説明する。御所のしつらえは、かつて名古屋の徳川美術館で見た「源氏物語絵巻」を参考にしながら、独自の世界観で構築した。千年前の高貴な女性である弘徽殿を演じる三吉の戸惑いや不安が、同じ女優として手に取るように分かった」といい、丁寧に演技指導した。「怒りをあらわにする場面では、



映画の一場面(©2019「十二単衣を着た悪魔」フィルムパートナー)

『お母さんとけんかしたことある?』と尋ね、そのときどんな声を出したか思い出させ、反映してもらった。黒木自身は「人は古い、時代は動く」という弘徽殿のせりふが心に響いたという。ただ誰かと張り合い、勝ち負けにこだわるのではなく、そのときそのときを人としての品性を保ちながら生きていく。自分もそうありたい」神戸国際松竹などで公開中。(片岡達美)

11月13日 金曜日 神戸新聞夕刊分

源氏物語は教材としてというよりも文学・読み物として面白い奥深いとよく聞きます。約千年以上の時空を越えて、この作品に触れる機会になると面白いのですが。